

御田植祭りの人形

黒田 一 充

年の初めに寺院のお堂や神社の境内で農作業を模擬的に行い、その年の稲の稔りや豊作を祈る芸能がある。古くは伊勢神宮の『皇太神宮儀式帳』（804年）で、2月初子日の神事に鋤で田を耕す所作をした記録があり、『皇太神宮年中行事』（1192年）でも、2月1日の神事に鋤で地面を打ち、桶に入れた小石をまき、藁を田に植える所作をしたことが記されている。

現代でも、田男^{たおとこ}と仮面をつけた牛が登場し、田起こし（田打ち）や耨まき、田植えなどの一連の農作業の様子が祭りの中で演じられる。近畿地方などではおんだ（御田祭）、愛知県以东では田遊び、全国的には御田植祭（神事）とよばれ、その中に人形が登場する所がある。

大阪市平野区杭全神社では、4月13日（もとは1月）に御田植神事が行われる。能の影響が強く、尉面^{じょうめん}をつけた翁が登場し、地方の謡^{うたい}に合わせて田起こしから耨まきまでを演じる。その後、翁が「太郎坊、次郎坊」と呼んで扇で招くと、市松人形を背負った田男とふたりの早乙女が登場する。翁はその人形を抱いて三宝に盛った白蒸を箸でつまんで食べさせ、桶に向かって放尿をさせる（写真1・2）。再び人形を背負った田男と早乙女は、苗に見立てた松葉で田植えを行って儀礼を終える。

明治42年（1909）2月3日、4日付『大阪朝日新聞』の「福の種子^{たね}」の記事には、人形（太

郎坊）を抱き取った翁が三宝に載せた米を南天の箸^{すく}で掬って食べさせる真似をし、再び田男に背負わせて田植えに移っており、今とは所作が異なっていたようである。

静岡県浜名湖北部の集落では、正月初めに村のお堂でその年の豊作を祈る儀礼（修正会）を行う。堂内で様々な芸能が奉納され、「遠江のひよんどりとおくない」として文化財に指定されている。その中に田遊びが含まれ、人形が登場する。

浜松市天竜区 懷山^{ふところやま}のおくないは、泰蔵院で剣の舞や鬼の舞、仏の舞など20をこえる演目が奉納される。参拝者たちも参加する田植の演目があり、その直後にネンネコーとよぶ人形を背負って子守が登場する。人形は布を丸めたもので、御飯に味噌汁をかけた汁掛け飯を食べさせる所作をする（写真3）。この汁掛け飯は、儀礼の終了後、参拝者にも振る舞われる。

同市北区引佐町川名の福満寺薬師堂でも、芸能の最後に田遊びの演目があり、水口打ちから稲刈りまでの農作業を演じる。その中で、オブッコとよぶ人形が背負われて登場する。藁人形に顔を描いて白衣を着せ、守り刀を負わせたもので、鏡餅を見せたあと、汁掛け飯を食べさせる。

同じ北区滝沢のおくないでは、林慶寺の本堂内で参加者が高盛飯を食べる平治まつり、本堂前で猪に見立てた草枝を弓矢で射るシシウチの



写真1・2 杭全神社の御田植神事（2017年4月）



写真3 懷山のおくない・ネンネコー（2014年1月）



写真4 滝沢のシートー祭り (2014年1月)

後、堂内の本尊前でシートーまつりが行われる。小祢宜とよばれる世襲の神役が、着物の襟首に人形を差し込む。ネンネコサマとよばれ、杓子を古布でくるんでいる。その前にあやす役がふたり座り、ひとりずつ肩から伸ばした長い櫛に足先を掛け、円を描くように足を3回廻してドスンと畳の上に落とす。それを見た一同が大声で笑うが、その声が大きいほど、その年は幸せになるという (写真4)。

牧之原市蛭ヶ谷の田遊びは、蛭児神社の境内で大きな篝火を燃やし、その前で牛引きや田植えなどの農作業の所作や太刀や長刀をもって踊る太刀振りなどの芸能が奉納される。神役は袴姿で、紙垂をたくさんつけた綾笠をかぶっているため表情は見えない。

ここでは、ほた (櫛) 人形が登場する。櫛は木切れを意味する語で、杉の枝葉の束を人形に見立て、長い綱の端に結んでいる。演目の最初のほた引きでは、多くの若衆たちが綱を持って大きな輪を作り、中央に立って唱え言をする神役の周囲を右へ回り、神役の動きに合わせて中央に固まってもみ合う。祭りの場に、稲に宿る



写真5・6 蛭ヶ谷の田遊び・田植 ほた人形 (2014年2月)

精霊 (稲霊) を降ろす儀礼だと考えられている。

人形はその後、田植の場面で子守に背負われて登場する。背中の上に見える頭の部分には白い布を巻いている。昼飯持ちの孕女や早乙女3人も登場し、早苗に見立てた杉葉を肩ごしに撒く (写真5)。その次の稲刈りですべての演目が終わると、人形は社殿の横に生えているソメイヨシノの木の下に縛り付けられ、翌年まで放置される (写真6)。桜の木と田の神との関係を指摘する見方もあるが、ソメイヨシノは明治以降に広がった樹木のため、それ以前の様子は伝わっていない。

人間の赤ん坊のように背負われる以外に、抱っこされて登場する人形もある。



写真7 財賀寺のお田植祭 (2005年1月)

愛知県豊川市の財賀寺のお田植え祭は、本堂内に置いた大太鼓の周りで農作業を演じ、途中で仮面を付けた牛も登場する。田植が終わると、昼飯持ちが赤飯を入れたお櫃を運んで現れ、続いて子守役がオコゾウサマを抱いて登場する。「シイコしよ、抱っこしよ」と参拝者に向かって小便をかける所作をする。男児の木偶人形で、このオコゾウサマを抱かせてもらおうと子どもを

妊娠すると伝えられている (写真7)。また新しい白襦袢を事前に預けて人形に着てもらい、祭りの後にその襦袢を自分の赤ん坊に着せると、その子は丈夫に育つと言われていた。静岡県掛川



写真8 平尾のおんだ（2011年1月）

市西大淵の三熊野神社や高知県室戸市吉良川町の御田八幡宮でも、人形を抱くと子どもを授かるという伝承がある。

子授けや子育て以外にも、病氣平癒を祈願する人形がある。奈良県宇陀市大宇陀平尾の水分神社では、1月18日の夜に境内の舞台上で御田が行われる。田植の演目が終わると、抱きかかえられて人形が登場する。若宮と呼ばれる黒い尉面を着けた藁人形で、全身に紙縊りが括り付けられている(写真8)。舞台の上に寝かせると、参拝者たちが順番に並んで、自分や家族の身体の調子が悪い箇所の紙縊りを貰って帰り、それで患部をさすると、症状がよくなるという。人形が悪いものを取り去る機能を負っている。

稲霊を象徴する人形もある。東京都板橋区の徳丸と赤塚の田遊びでは、どちらも本殿前にもがりおよび舞台を設け、中央に置いた大太鼓の周りで町歩調べと田打ちから順に、農作業を演じる。

徳丸では、田植の後に、早乙女の男児を大太鼓の上に載せ、大人たちが高く差し上げる胴上げを行う。そのあと太郎次とやすめの男女とともに、箆に載せたヨネボウとよぶ藁人形(写真9)が呼び込まれ、舞台正面に置かれる。演目は稲刈りへと進み、最後に大太鼓の上に田遊びで使った用具類を高く積み上げて一番上にヨネボウを載せる(写真10)。稲むら積みとよぶ演目からも、稲の稔りを表している。前述の浜松市懷山のおくないでも、稲むら積みでは、大太鼓に乗った男性が囃しに合わせて立ち上がり、手にした杵で天井を突く所作をする。

赤塚でも田植の前に早乙女が差し上げられ、ヨネボウが運び込まれる。こちらは藁人形を2体作って縄で縛ったものである(写真11)。このとき太郎次とやすめも登場する。どちらの田遊びでも二人は仲睦まじく抱擁する。稲の生育に人間の妊娠をなぞらえている。

御田植祭りでは、演目の途中で頭上に食事を載せて運ぶ昼飯持ち(小昼持ち・間食持ち)が登場する所が多い。女装した人物で、お腹が大きい妊娠した姿が共通している。徳丸と赤塚のやすめも妊娠した姿で現れ、そのときに人形も登場する。

さらに、奈良県川西町保田の六県神社のように、昼飯持ちがお腹に入れた太鼓を取り出してポンとたたき、赤ん坊が産まれたと喜ぶ出産の所作を演じる所もある。

静岡県藤枝市・滝沢八坂神社の田遊びでは、田植の後に孕早乙女が登場し、舞台中央に敷かれた蓆に二股の木偶人形を産み落とす。次の



写真9・10 徳丸の田遊び・ヨネボウ 稲むら積み (2008年2月)



写真11 赤塚の田遊び・ヨネボウ (2009年2月)



写真12 滝沢八坂神社の田遊び (2015年 2月)

で登場した農夫が人形を見つけ、両手で高々と上げて喜び、大事に抱いて退場する(写真12)。この人形はタロッコとよばれており、太郎からきているのだろう。静岡県内で出産の場面を伴う人形はここだけだが、九州にも見られる。

鹿児島県薩摩川内市では、3月初旬の春祭りみなみかたで田打ちが演じられる。高江町・南方神社の太郎太郎踊りは、踊りというより農耕劇で、小学生たちが境内を田に見立てて木鍬で耕した後、テチョ(父親)とオンジョ(爺)、太郎(息子)が登場してやり取りがあり、牛も現れて暴れまわる。この牛は、粳米2升を入れた袋を股間に吊している。その後、いったん引込んだ太郎役が女性の着物をかぶってヨメジョ(嫁女)として再登場し、赤ん坊を産み落とす(写真13)。長さ約20センチメートルの米粒型の石で、テチョがそれを取り上げて大喜びし、米粉を溶かした水で石を白く塗ってヨネマツジョと名付ける。参詣者の顔にも白く塗ってまわることもあるという。その後、神前に供えた玄米を参拝者に配る。

同日午後に行われる久見町・諏訪神社では、次郎次郎踊りとよんで次郎とテチョ、カカア(母



写真13 高江町の太郎太郎踊り (2020年 3月)



写真14 水引町の次郎次郎踊り (2020年 3月)

親)が登場する。調査時は雨天のためカカアが産んだのは代わりの人形だったが、こちらは本物の赤ん坊いすぐれが登場する。

同市水引町・射勝いすぐれ神社でも、次郎次郎踊りとして無言劇が演じられる。子どもたちが枝葉を持って虫送りをした後、白手拭で覆面をしたテチョが現れて、木鍬を使った田打ちや暴れ牛をなだめて代掻きをする。さらにテチョは「トッゴロ」と呼ぶ火のついた丸太をかついできて、害虫に見立てた見物客を追いつく。ひとしきり追いついた後、頭上に長方形の箱(モロブタ)を載せたヨメジョが登場し、テチョと抱き合うと赤ん坊を産み落とす。赤ん坊は粳米が入った袋で、テチョが掲げて大喜びする(写真14)。最後にモロブタに入れた粳と落花生を見物客に撒いて、儀礼が終わる。ほかにも大分県国東市安岐町の諸田山神社もろたさんや同市国見町の武多都神社でも出産の場面がある。

全国的には200か所以上で御田植祭が行われており、そのうち人形が登場するのは30か所ほどである。それぞれの土地で特徴的なものもあるが、遠く離れているにもかかわらず共通する要素も見られる。それは米の栽培と生長の過程を、人間の出産と成長になぞらえていることである。人形は人間の赤ん坊であり、本来は目に見えない稲霊をも象徴している。稲を栽培して育てることは、子どもを産んで育てていくことと同じぐらい重要なことなのである。

【参考文献】

新井恒易著『農と田遊びの研究』(上下巻、1981年)
野本寛一著『稲作民俗文化論』(1998年)

関西大学文学部教授